

日本創傷治癒学会理事長に就任して — 協調と発展

日本創傷治癒学会 理事長 岡田 保典



日本創傷治癒学会は平成25年1月より一般社団法人日本創傷治癒学会として再スタートしました。このような時期に理事長を拝命いたしましたこと、大変光栄に思うとともに本学会の更なる発展に努力してゆきたいと考えております。会員の皆様のご支援・ご協力を心よりお願い申し上げます。

本学会は昭和46年に慶應大学耳鼻咽喉科学鈴木安恒先生、病理学細田泰弘先生、東京電力病院外科藤城保男先生らが中心となり創傷治癒研究会として発足され、以来43年間にわたって活動してきた伝統ある学会です。その成り立ちと歴史については故大谷吉秀先生(慶應大学外科当時)のニュースレター(2004年4号No.20)に詳しく記載されています。平成12年の第30回研究会の際に創傷治癒研究会から創傷治癒学会へと昇格し、慶應大学外科北島政樹教授が初代理事長に就任され、学会会則の制定、Wound Repair and Regenerationの学会機関誌化、米国The Wound Healing Society、欧州The Tissue Repair Society、豪州The Australian Wound Management Associationとの連携など、本学会を国際的な学術団体として確立されました。その後、学会運営の中で若干の混乱がありましたが、日本医科大学外科徳永昭教授が理事長となられ、多大な尽力により、平成25年から一般社団法人日本創傷治癒学会として見事に再生いたしました。今年度の総会で、13名の理事、2名の監事の選出と10委員会が設置され、事務局も慶應大学外科学教室から同形成外科学教室へ移り、新しい陣容で学会が運営されることとなりました。

私は病理学を専攻し、「組織の破壊と再生におけるメタプロテアーゼ研究」を専門としており、創傷治癒のみならず、関節リウマチや変形性関節症での関節軟骨・骨の破壊と再生、癌細胞増殖・浸潤・転移機構、血管新生、心・血管・呼吸器疾患での組織破壊とリモデリングの研究をしています。本学会への入会は、金沢大学がん研究所より慶應大学病理学教室へ異動後であり、会員歴は十数年と比較的短いものの、本学会員の先生方との共同研究や意見交換により、創傷治癒に関して多くのことを学ぶことができました。また、本学会の創設者でもある北島政樹名誉理事長には入会のきっかけを作っていただいたことや、第1回研究会世話人の一人で



NEWS
LETTER

日本創傷治癒学会

2014.1
No.79

●日本創傷治癒学会事務局

〒160-8582

東京都新宿区信濃町35

慶應義塾大学医学部外科学教室内

tel.03-3351-4774

fax.03-3355-4707

e-mail: info@jswh.com

URL : <http://www.jswh.com>

あった細田泰弘教授は私の前任教授であったこと、さらには本学会の設立・発展に大きく貢献された故大谷吉秀先生とはアメリカ留学先で同門であったことなど、個人的なことではありますが、本学会を介した先生方との深い結びつきを今更ながら感じております。

創傷治癒学は、古典的には外傷や手術による皮膚損傷の治療に関する学問として出発しておりますが、現在では個体での病的刺激に対する組織損傷の再生・修復・治癒という生体反応のメカニズム解明とそれらのエビデンスに基づいた臨床応用を研究する学問と位置付けられます。実際、本学会では法人の目的として「創傷治癒に関する基礎的・臨床的研究の促進・発展を通じて、社会に貢献すること」と定款に明記しており、本学会総会ではこれらの趣旨に合致した演題が発表されています。

理事長就任にあたり、「協調と発展」というスローガンを掲げさせていただきました。平成25年度の時点での本学会員数は532名ですが、その分布は20代4%、30代35%、40代33%となっており、これらの会員を合わせると実に72%に達し、本学会の最大の特徴は若い世代が多くを占めている点にあります。専門分野は、形成外科学、外科学、皮膚科学、内科学、歯科口腔外科学、整形外科学などの臨床医学のほか、病理学、法医学、解剖学、生理学、生化学、細胞生物学などの基礎医学、看護学、獣医学、薬学、企業などの広い分野に跨っており、きわめて多彩です。これらの年齢分布と多分野の特徴を生かして、学会員の「協調」により、創傷治癒学の基礎医学、臨床・治療学での「発展」が強く求められています。学会員の皆様のご意見を聞きながら、本学会の発展に尽力する所存ですので、これまでも増して本学会への温かいご支援を心よりお願い申し上げます。

腹痛、腹部膨満感に

腹が冷えて痛み、腹部膨満感のあるもの

100

ダイケンチュウトウ
ツムラ大建中湯
エキス顆粒(医療用)

薬価基準収載



- 腸管通過障害に伴う腹痛、腹部膨満感に効果があります。^{1)~4)}
- 次の3つの機序による腸管運動亢進作用を示します。
 - 1) セロトニン3型、4型受容体を介するアセチルコリン遊離促進(イス、ラット、*in vitro*)^{5)~7)}
 - 2) 消化管運動亢進ホルモンであるモチリンの分泌促進(ヒト)⁸⁾
 - 3) 知覚神経におけるTRPV1チャンネルを介した作用(*in vitro*)⁹⁾
- CGRP、アドレノメデュリンを介して腸管(小腸、大腸)血流量を増加させます。(ラット)¹⁰⁾¹¹⁾
- アドレノメデュリンなどを介した抗炎症作用を示します。(マウス)¹²⁾
- 副作用発現頻度調査(2010年4月~2012年3月)において、3,284例中、64例(1.9%)72件に臨床検査値の異常を含む副作用が報告されました。(ラット)¹³⁾
- 重大な副作用は、間質性肺炎、肝機能障害、黄疸(いずれも頻度不明)です。

TRPV1 : transient receptor potential V1 CGRP : calcitonin gene-related peptide

効能又は効果

腹が冷えて痛み、腹部膨満感のあるもの

用法及び用量

通常、成人1日15.0gを2~3回に分割し、食前又は食間に経口投与する。なお、年齢、体重、症状により適宜増減する。

使用上の注意(全文記載)

1.慎重投与(次の患者には慎重に投与すること) 肝機能障害のある患者[肝機能障害が悪化するおそれがある。] 2.重要な基本的注意 (1)本剤の使用にあたっては、患者の証(体質・症状)を考慮して投与すること。なお、経過を十分に観察し、症状・所見の改善が認められない場合には、継続投与を避けること。(2)他の漢方製剤等を併用する場合は、含有生薬の重複に注意すること。3.副作用 副作用発生状況の概要 副作用発現頻度調査(2010年4月~2012年3月)において、3,284例中、64例(1.9%)72件に臨床検査値の異常を含む副作用が報告された。(1)重大な副作用 1)間質性肺炎(頻度不明): 咳嗽、呼吸困難、発熱、肺音の異常等があらわれた場合には、本剤の投与を中止し、速やかに胸部X線、胸部CT等の検査を実施するとともに副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行うこと。2)肝機能障害、黄疸(頻度不明): AST(GOT)、ALT(GPT)、ALP、 γ -GTPの上昇等を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。(2)その他の副作用

	頻度不明	0.1~5%未満	0.1%未満
過敏症 ^{注1)}			発疹、蕁麻疹等
肝臓	肝機能異常(AST(GOT)、ALT(GPT)、ALP、 γ -GTP等の上昇を含む)		
消化器	腹痛	悪心、下痢	腹部膨満、胃部不快感、嘔吐

注1)このような症状があらわれた場合には投与を中止すること。

4.高齢者への投与 一般に高齢者では生理機能が低下しているので減量するなど注意すること。 5.妊婦、産婦、授乳婦等への投与 妊娠中の投与に関する安全性は確立していないので、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。 6.小児等への投与 小児等に対する安全性は確立していない。[使用経験が少ない]

*その他の詳細につきましては製品添付文書をご覧ください。

[文献] 1) Yoshikawa, K. et al. Surg Today. 2012, 42(7), p.646. 2) 壁島康郎ほか. 日消外会誌. 2005, 38(6), p.592. 3) 三木智雄ほか. Prog Med. 2000, 20(5), p.1110. 4) Horiuchi, A. et al. Gastroenterol. Res. 2010, 3(4), p.151. 5) Shibata, C. et al. Surgery. 1999, 126(5), p.918. 6) Satoh, K. et al. Dig. Dis. Sci. 2001, 46(2), p.250. 7) Tokita, Y. et al. J Pharmacol Sci. 2007, 104(4), p.303. 8) Nagano, T. et al. Peptide Science 1998, 1999, p.329. 9) 株式会社ツムラ社内資料 10) Kono, T. et al. J Surg Res. 2008, 150(1), p.78. 11) Kono, T. et al. J Gastroenterol. 2011, 46(10), p.1187. 12) Kono, T. et al. Journal of Crohn's and Colitis. 2010, 4(2), p.161. 13) 香取征典ほか. Prog Med. 2012, 32(9), p.1973.



株式会社 **ツムラ**

<http://www.tsumura.co.jp/>

●資料請求・お問い合わせは弊社MR、またはお客様相談窓口まで。Tel.0120-329-970

(2013年1月制作)

■使用上の注意等の改訂には十分ご留意下さい。 VO-1001